

眠れなかった。

合宿最終日の夜。疲れ切った部員たちの寝息が、薄暗い大部屋の中にいくつも重なっている。畳の上に並んだ布団、消された天井の照明、窓から差し込む薄い月明かりだけが室内を照らしていた。

三日間の合宿は、正直、思っていたよりよかった。練習はきつかったけれど、セッターとして僕のトスを信頼してくれる先輩たちの動きを肌で感じられた。ミスをしても次に集中できた。バレーの話になれば、いつもより素直に言葉が出た。

ただ一つを除いて。

(脩さんが、すぐそこにいる)

隣の布団。距離にして、三十センチもない。

三矢脩。バレー部の部長。高校のときから映像で研究してきた選手。同じ大学を選んだ理由の一つ。

その人が、今、僕の隣で眠っている。

合宿中も、脩さんは普段と変わらなかった。練習では的確に指摘して、食事では冗談を言って笑わせ

て、夜には後輩の話を丁寧に聞いていた。誰に対しても同じように接する。だから僕も、特別に意識しているわけじゃないと自分に言い聞かせてきた。

(別に。部長への憧れなんて、誰でも持つものだし……)

僕はそっと寝返りを打ち、天井を見上げた。

浴室のことは、今回も乗り越えた。大浴場は避けて、消灯前に一人でシャワーを借りた。脩さんが理由も聞かずに時間を作ってくれたのは知っていたけれど、それも部長としての気遣いだと思うことにしていた。

明日の朝、荷物をまとめて帰ったら、また普通の二十歳の大学生に戻る。バレー部の一年生に戻る。この三日間は、悪い夢じゃなかったけれど、特別な何かでもない。

そう思っていた。

隣の布団から、温かい気配が近づいてきたのは――そのときだった。

「……っ」

最初、何かわからなかった。

ジャージ越しに、太ももの上へ温かい重みが乗っている。眠りかけていた意識が引き戻される。僕はそろそろと目を開けた。

脩さんは、仰向けのまま天井を見ているような顔をしている。けれど、その片手だけが、布団の陰から僕の布団へと入り込んでいる。

(……え？ 脩さん……？)

心臓が、跳ねた。

声を出さなきゃ。頭ではそう思うのに、体が動かない。

声を出せば、部員たちが起きる。十数人が眠っているこの大部屋で、部長と一年のこんな状況を、全員に見られる。

その想像が広がると、喉はますます固く塞がった。脩さんの手が、布団の陰でゆっくりと動く。太も

もの外側を確かめるように撫でていく。手のひらが、ジャージ越しに肌の丸みをなぞっていく。ウエストのゴムに指がかかり、その縁をなぞるようにゆっくりと動く。

「……っ」

声を殺す。膝を閉じようとした。けれど、脩さんの手はもう内側に入り込んでいて、太ももの間をじわりと押し広げるように進んでくる。

「そんなに固くならないで」

耳元で囁くような低い声。天井を見たまま、口だけが動いている。

「動いたら、みんな起きるよ♡」

その言葉が、僕を縛った。そうだ。動けない。声も出せない。この暗くて静かな部屋で、僕だけがお

かしなことになっている。

脩さんの指が、太ももの奥にある下着の縁へ触れた。ジャージの上から、薄い布の感触を確かめるように、つ、と撫でる。

「……っ、ん」

思わず漏れた声を、急いで呑み込んだ。

「ジャージ、もう少し下げてもいい？」

その瞬間、背筋が凍りついた。

（だめだ。下げられたら、ばれる）

ジャージの下にあるのは、ほかの男子部員たちとは違う体だ。男ならあるはずのものはなく、代わりにあるのは、女のような割れ目。ずっと誰にも見られないように隠し続けてきた、カントボーイの体。

こんなところでジャージを下げられたら、脩さん